

強化部会特殊健康診断結果の見方 <<校医監修>>

K-SMAPY II (個人情報照会)で結果を閲覧できます。

異常あり(保健室に要来室)の記載がある場合は保健室に来室してください。



内科診察

視診：全身を観察することで異常がないかを判断する

触診：身体に触れて異常なものを見つける

聴診：聴診器を胸や背中に当て呼吸や心臓の音を聞いて異常音が聞こえないかを調べる

心電図検査

心臓が鼓動を打つ際の微弱な電気信号を波形として記録し、その波形から心臓の状態を把握する検査です。不整脈や心臓の動脈硬化による変化などの有無を見ます。有所見の場合、放置してよいものから受診を必要とするものまで、いろいろな段階があるので、健康診断結果の判定に従ってください。



血液検査

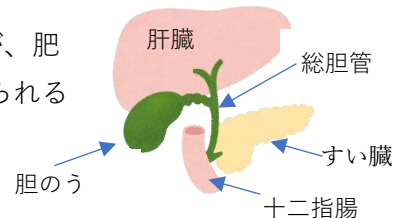
血液に含まれている化学成分や血球の量を調べて、病気の診断やリスクの発見に役立っています。



★肝機能(GOT・GPT・ γ -GTP)

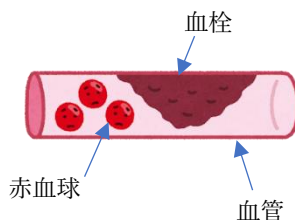
GOT、GPTは肝細胞がどのくらい壊れているかを示します。数字が大きいほどたくさんの肝細胞が壊れていることになります。しかし、GOTは肝臓だけでなく筋肉や血球にも含まれているので、激しい運動で筋肉組織が傷ついたり、血球が壊れた時も上がります。一方、GPTはほとんどが肝臓にある酵素なので、脂肪肝や肝炎など、肝臓そのものの障害が原因で上がります。

γ -GTPはアルコールの飲みすぎや特定の薬の服用で著明に上昇しますが、肥満に伴う脂肪肝などでも軽度～中等度に上がります。その他、肝臓でつくられる胆汁の通り路である胆管の通りが悪い時にも上昇します。



★脂質(総コレステロール)

血液中に含まれる脂肪分の1つで、細胞やホルモンを作るために必要な物質です。これが異常に高い状態が続くと動脈硬化の進行が早まり、心筋梗塞や狭心症、脳梗塞などが起こりやすくなります。



★糖代謝(血糖・HbA1C)

血液中のブドウ糖を測ります。

高血糖：空腹時に 110 mg/dl 以上で糖代謝の異常が疑われ、126 mg/dl 以上で糖尿病が強く疑われます。

低血糖：50 mg/dl 以下に低下すると冷や汗や手先のしびれ、冷感、意識障害などが現れます。特に糖尿病治療中の方は自覚症状に注意しましょう。

血糖は食事の影響を受けるのに対して、HbA1c は、だいたい2ヶ月くらいの血糖を反映するので、直前の食事の影響を受けにくい糖尿病の指標として、検査でよく利用されています。



★白血球

多いと体内のどこかに細菌による感染が存在する可能性があります。また、喫煙、運動、ストレス、肥満、アルコールの飲みすぎなどで増えることがあります。一方、風邪やインフルエンザなどのウイルス感染の時には白血球数が減少します。

少なすぎると体の防御反応が低下して、病気にかかりやすくなります。

個人差があるので、いつもの自分の値を知っておくことが大切です。



★赤血球・血色素・ヘマトクリット・MCV・MCH・MCHC・血清鉄

赤血球・血色素・ヘマトクリットが増加すると多血症が疑われます。水分不足、喫煙、ストレス、肥満などが原因のことがあります。減少すると貧血の存在を示します。貧血は食事の偏りや消化管・婦人科系臓器からの出血などで起こりやすく、血中の鉄欠乏をきたしていることが多いので、血清鉄を調べます（鉄欠乏生貧血）。また、スポーツをすることで、赤血球が衝撃によって血管内で破壊されて起きる溶血性貧血や、激しい運動に起因する貧血、血液をつくる臓器である骨髄の異常などによる貧血もあります。貧血の種類を区別するために MCV・MCH・MCHC を使います。



★血小板

血液を凝固させる役目を持っています。

増加は出血後の反応性増加や体質的に多いことがありますが、血栓ができやすかったり、骨髄増殖性疾患が隠れていることもあります。

減少すると鼻血や歯ぐきから出血しやすく、血が止まりにくく、ぶつけていないのに体に青あざができたりします。基準値以下ならピロリ菌感染、本態性血小板減少症、肝硬変の可能性も考えられます。



もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學